5章
知的障害者への代読と実習

1．はじめに

読書は人生の楽しみであり，一人だけでは狭くなりがちな考えの幅を広げてくれ，こんな考え方もあるのかと新しい考え方も発見できます。これらのことは，誰もが体験してほしいことです。しかし，知的障害者は，十分に楽しめているでしょうか。読書は，本と自分との内的な対話であるため，特に成人後には，個人の興味や自発性を重視したほうが望ましいと考えます。

成人期の知的障害者は，幼児期や学童期に親から読み聞かせをしてもらっていた人でも，親による読み聞かせは希望しなくなります。そのため，特に学校教育を離れた成人後の読書環境は貧しいのではないかと考えます。

知的障害者の読書や文字言語による情報保障の現状としては，読める（見る）本が限られていたり，生活年齢に応じた興味ある本は読めないことが多いため，読書を楽しんだり，必要な情報をわかる形で得たりすることは難しいと思われます。

知的障害者への読書を楽しむ権利保障や情報保障の活動における先進国スウェーデンでは，どのように取り組んできたのでしょうか。1960 年代から LL ブックの出版を進めてきたスウェーデンですが，本は出版されたが，知的障害者に LL ブックがあるという情報が届かない，LL ブックを読んだり見たりしてもらう機会がないという問題が起こりました。そこで 1992 年に，LL ブックの出版と普及を進める LL 協会が全国知的障害者協会との共同作業で，知的障害者に LL ブックを紹介し代読する朗読代理人制度をつくりました。さらに地方自治体，図書館，成人教育の団体や特別支援学校などのメンバーによるワーキンググループが結成され，本格的な朗読代理人の活動が始まりました。

日本では，2017 年から 2022 年にかけて，奈良県桜井市と生駒市，大阪府吹田市と河内長野市，東京都調布市と荒川区の各図書館で，代読ボランティア養成に向けた講座（p. 8）が開催され，代読の理論を学ぶ講座と実習を行いました。そして，生駒市（pp. 64–69）等では代読ボランティア活動が始まっています。

2．講座の流れ

この講座と実習では，講義で代読の意義やその方法を学び，実際の代読の様子を動画で視聴したのちに，知的障害者を対象に実習します。そのあとに，グループ別に実習で経験したことをもとに討議をし，その内容を受講者全員で共有します。全部で約 3 時間です。2 講座分の 3 時間を，内容に合わせて配分しています。

表 5－1　講座の概要

講義	60 分	・スライドによる講義 ・実際に代読をしている様子を撮影した DVD の視聴
実習	60 分	・受講者 3 ～ 4 人と当事者 1 人で 1 グループとなり，受講者全員が当事者へ代読を行う（1 人当たり 15 分程度）
休憩	15 分	
グループ別討議	30 分	・実習での感想や疑問などをグループごとに討議する
討議内容発表	30 分	・各グループで討議したことを発表し，受講者全員で共有する ・質疑応答

開催する図書館の講座前の準備

・当事者には事前に，読んでほしい本（雑誌や新聞でもよい）を数冊持参してもらうよう依頼しておきます。
・図書館で読みたい本を代読者と一緒に探すことから始める場合もありますので，受講者に書架の配置を伝えておきます。
・グループの数だけ，周りからの雑音が入らない静かな部屋を用意します。できれば，時計や貼り紙などのない壁に向かって代読者と当事者が並んで座れるように机を配置しておきます。
・長机 1 台，グループ人数分の椅子，ブックスタンド，リーディングトラッカー，白い厚紙なども用意します。

3．講義

（1）代読とは

知的障害者への読み聞かせと代読の違いは何でしょうか。

多くの知的障害者施設では，余暇の時間に当事者への「読み聞かせ」が行われていると聞きます。そこでは，読み手が読み聞かせる本を選んで読み，受け手（聞き手）である当事者はそれを見たり聞いたりします。つまり，読む本を選ぶのは当事者ではなく，読み聞かせる読み手です。当事者にとっては，仲間と一緒に聞くことで喜怒哀楽を共有でき楽しい機会となるでしょう。好きな本が増えることもあるでしょう。しかし，毎回，当事者が読みたいと思っている本というわけではありません。もちろん読み手はいつも聞き手の反応を見つつ読み進めていますが，人の好みは一人ひとり違うのです。

一方，「代読」では，「私が読みたいこの本を読んで」と，当事者自身が読みたい本や雑誌や新聞等を選択して決定するのです。ここが，読み聞かせとは大きく違うところです。読みたい本や雑誌，新聞等があるけれど，当事者が自分一人では文字で書かれた情報を読み取ることができないとき，知りたいことがあるけれど何を読めばよいかがわからないとき，代読者がいれば，読書を楽しんだり，情報を得たりすることができます。

また，読み手（代読者）と聞き手（当事者）は，一対一で，向かい合ってではなく横並びに座ります。当事者が選んだ本を一緒に見ながら，代読者が読み，当事者は聞きます。当事者はわからないところがあれば何度でも代読者に尋ねます。難しいことばは，代読者がわかりやすいことばに言い換えたり説明をしたりして，当事者の理解に合わせて読み進めます。

知的障害者には，自分の読みたい本を自分で決められない人や読んでほしくても伝えられない人がいます。どうしても他者から世話されたり指示されたりする受け身的な関係のもち方が多くなりがちなので，自分で選んで決める能力や，要求を他者に伝える自発性が育ちにくいのです。代読経験をもつことで，本を選択したり要求を伝えたりコミュニケーションを図ったりすることが得意になる人は多いと思われます。

代読者にとって難しいところは，初めて出会った人に，初めて出会った本を読むことです。今まで講座を受講された人からも，「（当事者が）どのような方なのか事前に知っておきたい」「初めて読む本に戸惑いをもった」という声がありました。

一方で，当事者にとっては，自分が読みたいものを，コミュニケーションをとりつつ読んでもらえることで理解が促進され，新たな発見や楽しみがあります。それによって疑問が湧いたり好奇心を抱いたりと，読書意欲も育まれます。読書を楽しむ権利保障や情報保障の楽しさを知ることで，その人の人生は豊かになり，人格形成の一助になることでしょう。

先に述べたように読み聞かせをしている知的障害施設は多くみられますが，代読をして

いる施設はまだまだ少ないと思われます。当事者や保護者からの要望を期待したいところですが，まずは施設側が地域の図書館と連携していくとよいのではないでしょうか。

（2）代読に適した時間・場所

1）代読時間

実際に代読する時間は，15 分程度が適当です。

図書館で代読する場合には，当事者と一緒に本を探したり，読むところを決めたりするので，当事者との予約時間は約 30 分とします。図書館内を一緒に回って探すこともあるので，その図書館の書棚の配置も大まかに知っておくとよいでしょう。

しかし，上記のことは原則であり，知的障害の程度はさまざまなので，個々に対応することも必要です。代読しているときの当事者の集中度によって時間は判断してもよいし，「終わりましょうか」とか「続けましょうか」と当事者に尋ねるのもよいです。そのときの様子から集中度が高ければ 15 分時間を延ばして 30 分間とし 45 分間の予約としてもよいでしょう。

2）代読する場所

代読する場所は，代読を求める人（施設等），図書館，ボランティアが相談のうえ，図書館であったり，作業所や施設であったりします。場所によって環境は違いますが，原則的には，周りから雑音が入らないできるだけ静かなところ，いろいろなものに気が散らないところが望ましいです。例えば，個室や部屋の隅のほうで，時計もなく何も貼ったり飾ったりしていない壁のほうにむかって座ります。

（3）代読の方法

1）当事者との対面・挨拶・ルールの共有

①当事者との対面・挨拶

挨拶をして名前を伝えます。当事者の名前もうかがって，「これから〇〇さんの読んでほしい本を読みます。雑誌や新聞でもいいです。いっしょに楽しみましょう」と，代読に期待感がもてるように話しかけます。

知的障害があっても人としては対等です。相手を尊重し，生活年齢にあった言葉遣いや接し方をします。

②ルールの共有

代読のルールを当事者に伝えます。

- **わからないときはいつでも代読者に尋ねてよいことを伝えます。**
  私たちもそうですが，わからないことを「わからない」と発言することは難しいことです。このことを最初に伝えておくのとないのでは，当事者にとっては，安心感が違います。

- **聞いているのが嫌になったり，読む本を替えたくなったりしたときは，「休憩したい」「本を替えてほしい」等と代読者に言ってよいことを伝えます。**
  読んでほしいと思っていた本が期待どおりでなかったり，体調が悪かったりするときは，集中できません。申し出があったら，休憩したり，本を替えたりして，当事者が無理せず代読を楽しめるように対応します。
- **代読の予定時間（15 分間）を伝え，もっと読んでほしいと思う場合は，読み終えた時点で「もっと読んでほしい」「時間を延ばしてほしい」などと代読者に要求してもよいことを伝えます。**
  申し出があったら，当事者の様子を見ながら 15 分延長し，合わせて 30 分を上限として代読を続けましょう。人によっては，時計を見せながら予定終了時刻を伝えた方がわかりやすい場合があります。また，自分から要求しにくい人もいるので，「終わってよろしいですか」と尋ねてあげることもいいでしょう。

2）本を受け取る・一緒に探す

当事者から読んでほしい本を受け取ります。複数冊あるときは，どれから読めばいいかを尋ねて，当事者が選んだ本から読みます。

本を持ってこなかった人や自分で探せなかった人には，「読みたい本をいっしょに探しましょう」と伝え，図書館の書棚や施設で行う場合は本のある場所へ移動します。どのような本が読みたいかを尋ねて，読みたい本を当事者本人が選べるように手伝います。代読者は図書館の書架の配置を大まかに知っておきましょう。

3）開始

①座る位置

横並びに座るにあたって，左右どちらの席がよいかを尋ねてから着席します。知的障害者の中には他人が自分の近くに座る場合，右側か左側か，どちらかに苦手意識のある人もいます。聴力に左右差がある人もいます。

②本の見やすい工夫

平置きか，ブックスタンドを使ったほうがよいかを聞きます。

代読者が読む行に白い厚紙やリーディングトラッカーを当てたほうが，その箇所が当事者にはわかりやすいこともあります。これらを当てたほうが見やすいかどうかを尋ねます。人によっては，厚紙やリーディングトラッカーに興味がいってしまい，見せなければよかったと思うこともありますので，当事者の反応を見つつ判断します。

③読み方と対応

- **ゆっくり読みます。感情移入して読んでも，標準語でなくともよいです。**
  早口で読まれると聞き取れなかったり，理解しにかったりというときがあります。方言で読んだり感情移入して読んだりしたほうが，よりいっそう本の内容に共感がもて

ます。

- **難しいと思われるところは説明を加えたり，やさしい言葉に変えたりして読みます。**
  どこまで説明したものか迷うところですが，これは当事者の反応を見つつ判断していきます。日常ではあまり使わない言葉，漢字 3，4 字以上の熟語やカタカナの外来語，こそあど言葉，長い文章を難しく感じる人は多いので，当事者が理解しづらそうであれば，内容が変わらない範囲で説明したり言い換えたりして読みます。
- **当事者の反応を見ながら読みます。**
  代読というのは，一冊の読み物を共有して，読み手（代読者）と当事者がコミュニケーションするという場でもあります。楽しんでいるか，理解しづらそうにしていないか，様子を見ながら読み進みます。
- **ときどき本から目を上げて，アイコンタクトをとります。**
  共感しあうということですが，これを嫌がる人もいるので反応をうかがいつつ対応します。
- **代読者にもわからない字が出てきたときは，一緒に辞書を調べます。**
  当事者にはわからないだろうとごまかさないようにしましょう。辞書を一緒に調べることで，代読者にも聞き手（当事者）にも，新しい発見があるかもしれません。
- **「わかった？」などの不要な質問はしません。**
  頻繁に「わかった？」など，聞き手の理解を確認するようなことは，読書の楽しさを中断しますし，成人している人を子ども扱いしているようにもとられてしまいます。また，知的障害者は「わかった？」と尋ねられると，「わかった」と答える人が多いのです。これは，わからないことを知られたくないという気持ちがあったり，「わからない」と言うと理由を尋ねられるので，それを避けたいという気持ちがあったりするからです。「わかった？」と尋ねるのは，できるだけやめておきましょう。
- **目立つマニュキュアやきらきら光る指輪は控えましょう。**
  隣り合って座るので，本より目立つ手指に関心をもつ人がいます。読み手は身につけるものに配慮しましょう。

4）終了

代読の終了時には，一緒に読めてよかったという気持ちを言葉で伝えましょう。当事者の選んだ本がおもしろかったなど，簡単に代読者の感想を述べるのもいいでしょう。

代読の手順と留意点

1

挨拶をして名前を伝えたあと，代読のルールを共有します。

代読に期待感が持てるように話しかけます。その際，相手を尊重し，生活年齢に合った言葉遣いをしましょう。知的障害があっても人としては対等です。

【共有するルール】
- わからないときはいつでも代読者に尋ねてよいことを伝えます。
- 聞いているのが嫌になったり，読む本を替えたくなったりしたときは，代読者に言ってよいことを伝えます。
- 代読の予定時間（15分間）を伝え，もっと読んでほしいと思う場合は，読み終えた時点で延長を代読者に要求してもよいことを伝えます。

2-1

当事者から読んでほしい本を受け取ります。複数冊あるときは，どれから読めばよいかを尋ねます。

2-2

本を持ってこない人や自分では探せない人もいます。そのときは，読みたい本を当事者本人が選べるように手伝います。

3

左右どちらの席がよいかを当事者に尋ねたうえで，横並びで座ります。

知的障害者の中には，自分の近くに他人が座る場合，右側か左側か，どちらかに苦手意識のある人もいます。

平置きにするかブックスタンドを使うかは，当事者に確認しましょう。

4 代読者の読んでいるところがわかりやすくなる工夫をしましょう。読む行に厚紙やリーディングトラッカーを当てた方が見やすいこともあります。

【読み方と対応】
・ゆっくり読みます。感情移入して読んでも，標準語でなくともよいです。
・難しいと思われるところは説明を加えたり，やさしいことばに変えたりして読みます。
・当事者の反応を見ながら読みます。
・ときどき本から目を上げて，アイコンタクトをとります。
・代読者にもわからない字が出てきたときは，一緒に辞書を調べます。
・「わかった？」などの不要な質問はしません。
・目立つマニュキュアやきらきら光る指輪は控えましょう。

代読の終了時には，一緒に読めてよかったという気持ちを言葉で伝えましょう。

（4）代読 DVD の視聴

実習に入る前に，実際に代読している様子を撮影した 10 分間ほどの DVD を視聴します。受講する皆さんに代読のイメージをつかんでもらうことを目的としています。対象となる当事者によって様子は異なるので，動画の内容どおりに進むというわけではありません。

DVD に登場する当事者は，いずれもダウン症がある 20 歳の女性 A さんと 21 歳の男性 B さんです。

1）20 歳の女性 A さん

A さんは，小中学校を地域の学校，高等学校を特別支援学校で学びました。現在は就労支援の施設に通っています。ひらがなといくつかの漢字の読み書きができます。

彼女が持ってきた本は，アイドル雑誌でした。よく手にしているのか表紙はボロボロでした。「どこを読もう？」と聞いても「どこでも」という返事で，読み手が「この人のところを読もうか？」と聞くと「はい」と答えるだけでした。しかし，読み始めると，彼女のほうから，「ここ」と読んでほしい個所を指定するようになってきました。そこを読み終えるとすぐにまた「ここ」と指さします。

これまでは各々の説明文までは読めず写真だけを見ていたにちがいありません。代読者と共に読むなかで，写真だけからでは知ることができなかったアイドルのことがわかるようになり，読んでもらいたいところが次々とでてきたのでしょう。代読によって，彼女の興味や関心の高まりを実感することができました。

2）21 歳の男性 B さん

B さんは，小学校を地域の学校，中学校と高等学校を特別支援学校で学びました。現在は就労支援の施設に通っています。ひらがなといくつかの漢字の読み書きができます。

彼が持ってきたのは，スポーツ新聞と彼の母親が年に数回発行している彼の様子を書いた A 4 一枚のミニコミ誌です。「どちらを読もう？」と聞くとミニコミ誌を選びました。最近の出来事が書いてある中から「どこを読もう？」と聞いて，彼が指さしたところから読み始めると，祖父が亡くなり形見分けに帽子をもらったことが書いてありました。吃音もあり発語不明瞭な彼にとっては，久しぶりに会う代読者に，一番に伝えたかったことなのかもしれません。そして，代読中には，自分を可愛がってくれた祖父を思い出していたのかもしれません。通っている作業所のことなど，彼が「ここ」と選ぶ箇所すべてを読み終えました。

次に読んだのはスポーツ新聞です。野球好きな人は毎日読んでいるかと思いますが，知的障害者もよく読んでいます。写真が多く，それも好きな選手の一番格好良いところが写っているのですから，文字が読めなくとも楽しめます。彼が読んでほしいと言うところを読むと満面の笑みを浮かべて，その試合の様子をジェスチャーで再現してくれました。

代読者と当事者がミニコミ誌や新聞を介して，彼の出来事や彼の経験したことを共有し合うことができました。

二人への代読の動画は代読の具体的な方法を示すだけはなく，自分が読んでほしいものを読んでもらうことがもっと知りたいという気持ちや意欲を高めること，代読者とのコミュニケーションが興味を共有できる喜びを生むことを教えてくれています。Bさんのミニコミ誌のように，個人にとって大事な情報を読んでもらえるのは，代読の良さであり意義であると思います。

4．実習

各グループにわかれる前に，協力してくださる当事者の紹介を受けます。そしてお互いどのグループになるのかを確認し合い，実習場所へ移動します。実習や話し合いが円滑に進むように，最初にタイムキーパーと記録者と報告者を決めておきます。タイムキーパーは実習中の時間配分をします。記録者は実習後の話し合いのときの記録をとり，報告者は話し合いをまとめて報告します。

当事者に向けて代読するのは15分です。代読している人以外は，その様子を見学します。見学者の座る位置は，代読の邪魔にならないように，はじめに当事者と相談しましょう。代読者たちはお互い見学し合うことで学び合うことができます。

当事者にとっては，代読者が代わるとはいえ，長時間の代読となり疲れる場合もあるかもしれません。様子を見つつ代読を進めてほしいと思います。あるグループでは作業所の仕事を終えてから実習に協力してくれた当事者が，１時間の代読を楽しそうに聞いている様子を見て，付いてきた施設職員が驚かれていたこともありました。

図５－１　横並びに座って代読の実習（桜井市立図書館）

5．グループ別討議と討議内容の発表

実習後に，各グループ別に実際に代読してみての感想や，受講者どうしの見学をしていて感じたこと，それらの中から疑問に感じたことなどを 30 分討議します。その後，一同に集まり，各グループでの討議内容を発表し，感想や意見や質問を共有します。

今までの講座の話し合いの中から質問のあったことをＱ＆Ａでまとめました。

【話し合いの中で出てきたことのＱ＆Ａ】

Q.

相手の情報がわかりません。前もって聞いておいたほうがよかったのでしょうか？当事者の様子や実態がわからないなかで，当日渡された本を読むのが難しいです。

A.

代読の難しさ，それは代読者にとって初めて読む本，初めて出会う人であるということです。代読の場合も読み聞かせの場合も，聞き手がどのような人なのか前もって聞いておくことなどできません。知的障害の程度も人によってまちまちです。このことが代読の難しさでもあり楽しさでもあるかもしれません。代読者としての経験を重ねる中で，解決法が徐々にみつかることでしょう。

Q.

コミュニケーションが上手にとれるかどうか不安です。「代読とは何か」が相手によって違うので，基本や大切にしないといけないことについて悩んで迷ってしまいます。

A.

この質問には，スウェーデンの代読者養成の研修資料「一緒に読みましょう」の一節を紹介します。

「あなたがしてほしいと思うように，その人に接しましょう。
誰しもほかの人からはあたたかな礼儀正しい態度で接してほしいと思うものです。
誰もが自分は，必要なほかの人々から愛される人間だと感じたいのです。
さまざまな人々を温かく迎えるためには自分の人間性を見せるのが，一番のルールです。
心からの笑い，微笑み，あいさつやアイコンタクトはすてきな贈り物です。」

Q.

当事者が集中できる時間が短いようです。途中で終わってもよいのでしょうか？

A.

15 分というのはひとつの目安であり，読書への集中度は人によりさまざまです。当事者の反応を見つつ判断すれば結構です。また，当事者に聞いてもらってもいいでしょう。

Q.
代読中，どこまで説明を加えてよいか，判断が難しいです。わかりにくい内容をどこまで読めばよいのでしょうか？

A.
代読者として判断を迷うところです。多くの知的障害者は，ふだん使わない抽象的な単語や長い文章を理解するのが苦手です。聞きなれない外来語や漢字が 3，4 文字以上連なる単語，1 つの文章にいくつものことが書いてある文章などです。このような特徴のある読みものについては，説明を加えながら聞き手の反応を読み取りつつ，代読を進めてください。

この質問に対して，長年知的障害者への支援をしてきたスウェーデンの代読人養成研修資料「一緒に読みましょう」の中に強い味方になってくれる一文があります。

「全ての方法は良い。悪い方法を除いては」

知的障害者への代読において，これが正解だというものはありません。代読は人と人との関係の中で成立するのですから，この人に読んだものが，あの人にもそのまま通じるということはないのです。

Q.
今まで代読でどのような読み物が選ばれましたか。選ばれた本が図鑑や乗り物の本など，想定外の本だったので，どのように読めばよいのか，難しかったです。

A.
乗り物や動物の本や図鑑，絵本，手話の本，病気や健康の本，恋愛の本，LL ブック，マンガ，スポーツや一般の新聞，旅行のパンフレット，旅行ガイドブック，芸能やテレビ番組やファッションの雑誌，ミニコミ誌等，いろいろな読み物が選ばれています。知的障害者の中には，図鑑や乗り物が大好きという人もいます。どこから読んでよいのやらと悩んでしまいがちですが，このときこそ見開きのページから読んでほしいところを当事者に自己選択自己決定をしてもらえばよいのです。そして，文字のないページは絵や写真について説明します。今までその写真や絵だけしか見てなかった人にとって代読者が自分のために読み説明してくれるのですから，こんな嬉しいことはありません。

Q.
知的障害が重く，自分で本を選ぶことができないように思うのですが，困ってしまいました。

A.
知的障害の程度は本当にさまざまで，成人になってもほとんど話すことができない人もいます。どの本が良いのか読書を楽しめるのかと悩むこともあるでしょう。自己決定自己選択の最初の一歩は，二者択一からです。代読者が選んだ 2 冊の本をみせて，どちらが読みたいかを選択してもらいます。指さすことができる場合は本人の意思がわかりやすいで

すが，指さすことができない場合は，本を代読者が持つなり机に置くなりして当事者がよく見えるようにし，１冊ずつ「どっち？」と尋ね，本を触ったり長く見つめたほうを選択決定したとみなします。読書を楽しめたかどうかは，笑顔や発声です。本を媒介にして代読者と当事者は，コミュニケーションをしているのです。

６．おわりに

講座終了後に行ったアンケートから，感想等を以下に紹介します。

【受講者の感想】

- どのような方も，読書の機会を得られるべきだと，強く思いました。
- 読み聞かせと代読の違いが，わかった。
- 代読のめざすものは「読書を楽しむ権利の保障」だとわかった。
- 関心のなかった，気にもしなかった世界を理解すること，知ることができた。
- 代読した私も，楽しかった。
- 場数と自分が楽しむことだということがよくわかり，おもしろいなと思いました。
- 何人もに接していると，その内この人にはこの方法で行こうと，判断できるようになるかもしれないと思った。
- 映像もあり，代読の雰囲気がよくわかった。知的障害のある方へ実践させていただき，新しい発見もあった。機会があればやってみようと思った。
- 個々を大切にする場面づくりに必要なことがより一層感じられた。
- 人と人とのコミュニケーションが大切。
- 継続して担当したい。
- 読んでいると，こちらも本の内容に引き込まれ，次はどうなるのか？　楽しいひとときを共有できたような……（でもただの自己満足かもしれませんが）。仕事では障害のある子どもに対しての読み聞かせが多いのですが，一緒に本を選ぶときなど参考になりました。
- 最初に食べ物がお好きと聞いたので，読みたい本のジャンルがはっきりしていて本をできるだけたくさん選んでいただいたのですが，初めに選んだ本が文章中心であまり興味を示されていない雰囲気が感じられたので，途中，施設の職員に写真をごらんになるのが好きとうかがってから，いろいろなお話をしつつ読み進めることができました。緊張されていたようでしたが，ときどき笑顔を見せていただけたことがうれしかったです。

【当事者の感想】

- 楽しかった。
- 話がいっぱいできてよかった。

• 本を読んでもらったのがよかった。
• 次はいつ？

【引率の作業所職員の感想】

• 利用者が「うん，うん」とうなずきながら聞いたり，自分の思いを伝えたりする姿を見て，人との触れ合いがもて，温かみのある活動だなと思った。
• こんなに本が好きな人だとは知らなかった。集中して聞かれていた。

知的障害者への代読を初めて経験された方々が，上記のような意見や感想をもたれたことは，今後の代読活動の広がりを感じます。今まで，知的障害者に関わることのなかった人でも，養成講座を受ければ誰でも代読者として活動することができます。図書館によっては，６コマの講座に加えて，代読の実習を中心に半日のステップアップ講座をしたところもあります。初めて出会う人に初めて出会う本を読むことに大きな不安があると思います。そのとき，代読者を励ましてくれるのは，Ｑ＆Ａにもあるスウェーデンの研修資料「一緒に読みましょう」の言葉です。

代読の活動において大切なことは，読書を読み手も聞き手も一緒に楽しみ，当事者に「また読んでもらいたいな」という気持ちを持って帰ってもらえるようにすること，また，成人している当事者には大人として接することです。代読者は，当事者の本や情報への興味や関心を広げるお手伝いをする人であり，代読することによって本と当事者とを結ぶ人です。日頃から幅広い分野に関心をもつように心がけて，言葉に対してアンテナを高くはっておきましょう。

本だけでなく雑誌・新聞・ネットなど文字を読むのが苦手な知的障害者への代読活動も重要です。日々発信される情報の中から当事者が知りたい情報をわかりやすく提供する機会でもあります。

「読書バリアフリー法」が 2019 年 6 月 28 日に公布・施行されました。このことで知的障害者への読書サポートの充実が期待されます。代読をすすめるため，全国の図書館で代読ボランティア養成講座を開催してもらいたいと思います。当事者や保護者が読書を楽しむ権利保障や情報保障を要求していくことも大切です。そして障害のあるなしにかかわらず大切なこと，それは小さいときからの読み聞かせです。知的障害者も，小さいときからの本や活字の文化に親しむ体験をし，成人してからは代読者と共に読書を楽しみ，人生を豊かに過ごしてほしいと願ってます。

（吉田 くすほみ）